

この1冊で世界がわかる
宗教のキーワード集

編 三木 紀人
山形 孝夫

- ◆世界三大宗教（イスラーム・キリスト教・仏教）、そしてユダヤ教、ヒンドゥー教、神道etc.の、みんなが知りたいキーワード約150を収録！
- ◆世界のニュースに強くなる！ マスコミ関係者・ビジネスマン・研究者も必読！



ヴェーダ

ヴェーダ (Veda) はバラモン教祭式文献群の総称で、「知っている」を意味する動詞の派生語である。祭式は神の恩恵にすぎない祈りの儀式ではなく、宇宙の理法(リタ)を「知っている」ことに基づいて自然界・人間界を操作する手続きであった。正しく発せられた語(マントラ「真言」)は実現力「ブラフマン」をもち、それに携わる者がブラーフマナ(婆羅門)である。神々との間には give-and-take の契約観念が優勢で、意志や命令を表す語形によって神々に呼びかける。祭官階級がことばによる営み全般を管理していたらしく、当時の「世界理解の学」が総動員されている。厳密な工夫によって正確に口頭伝承された。

ヴェーダは祭式に参加する四祭官職の学派毎に順次編集された。インド・イラン共通時代の主要祭官であったホートリは神々への讃歌集『リグヴェーダ』を伝承する。作者はカヴィ「見

者」、リシ「荒ぶれる者」、ヴィツプラ「うち震える者」と呼ばれ、背後に蜜酒やソーマ(イランのハオマ、おそらく麻黄)の役割が伺われる。ホメーロスと重なるインド・ヨーロッパ祖語時代からの要素も見られ、インド・イラン共通時代の遺産は大きい。アフガニスタン付近での定住期を交えた遊牧移動生活を反映し、掠奪や植民活動も正当な活動の一部であった。紀元前1200年頃インダス川上流域で編纂固定され、現存作品は往古の詩人が感得した(「見た」)真正讃歌の模倣と当時の詩人の独創との両極間に位置する。ソーマ祭において讃歌に節をつけ、詠唱(サーマン)を担当するウドガートリは「サーマヴェーダ」を伝承する。祭式の実際はアドヴァリユ祭官が担当し、用いる祝詞やジユスは『ヤジュルヴェーダ』にまとめられた。第四に治療、調伏、願望成就等の呪法を主内容とする『アタルヴァヴェーダ』が加えられる、当該祭官には祭式を統括管理する職掌が割り当てられた。ヤジュルヴェーダ各学派は3〜5祭

火を要する「シユラウタ祭式」(シユルテイ「伝承・学習」に基づく祭式)用の祝詞をまとめ(B.C.1000~800)、祭式の意義付けを議論して「ブラーフマナ」を編集した(同800~650)。後者には神話や由来などが語られ、重要資料である。古くは祝詞集と共に「サンヒター」(「続け読み」を意味する後代の語)に含まれ、後には「ブラーフマナ」として独立に編集された。シユラウタ祭は穀物祭、動物犠牲祭、ソーマ祭に大別され、太陽・月・年の巡り等の自然界の秩序維持、部族・共同体の存続繁栄などに関わる。祭主は大家長ないし大祭官で、祭主夫妻と複数の祭官が参加する。「ブラーフマナ」に続き、祭式の文脈から離れた哲学書「ウパニシャッド(ものの背後にあるもの)」が成立した(カルマの項参照)。祭式の次第を定める「シユラウタストラ」、一般家長の祭式を扱う「グリヒヤストラ」(B.C.400頃)、アーリヤ社会の規範を定めた「ダルマストラ」、発音や測量の教本、葬礼書、索引類などが付属文献群を成す。

(後藤敏文)

カルマ (業)

カルマ (業) はカルマン (Karma) の単数主格形で、「作ること、為すこと、行為」を意味する普通の語である。死と再生の循環、すなわち「輪廻」(サンサーラ)の理論との関連で、ある行為が最終的結果をもたらすまでの「潜勢力」の意味を持つに至る。「業」は「輪廻」と一対をなし、仏教を含む全てのインド思想・宗教の公理となっている。

祭祀行為としてのカルマとその結果としての死後のあり方(来世)を巡り、ブラーフマナ文献(ヴェーダの項参照)では「祭祀と布施の効力」(イシュタープールタ)の理論が精密化された。ある人が現世で祭祀・布施を行うとその効力が天界に蓄積され、死後当人は天界でこれと合体する。効力が尽きると天界で「再死」し、地上でその効力に応じた次生へと「再生」する。その繰り返し「輪廻」である。祭祀と布施の効力が無尽で「再死」を

免れ、「ブラフマン (梵天)の世界」で「不死」(アムリタ)を享受することが究極目標であった。

ウパニシャッドでは、この理論が日常行為一般に拡大され、かつ、天界での滞在から地上への生まれ変わり方へと重点が移り、ここに「業」と「輪廻」の理論が確立する。その典型はブリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッドIV4に見られる。人が欲望に基づいて為す善悪の「行為」は、知識、前世までの知恵(洞察力)と共に天界に蓄えられており、死後、アートマン(輪廻主体)が認識機能を伴って天界に至ると返却される。アートマンは、その蓄えによって神やガンダルヴァとして天界に暮らし、蓄えが尽きると地上に再生する。地上でどの母胎に下降(アヴァクラーンティ)し再生するかを決定するのも行為、知識、知恵の三者である。あくまで一個人にのみ関わる閉じた理論であり、親の因果が子に報いることはない。

の帰入から、「梵我一如」、すなわち、アートマンと宇宙の究極原理ブラフマンとの合一、またはそれを知ることへと展開した。このような前史から地上への再生は否定的に捉えられ、仏教では「四聖諦」中の苦諦の一つ「生苦」の觀念に受け継がれる。「天人五衰」にも名残が見られる。ゴータマ・ブツダは「行為」の連鎖がもたらす輪廻という苦からの解放を探求し、輪廻主体の完全消滅である「涅槃」への道を見出し、「不死への門」を開いた。輪廻主体としての恒常不変のアートマンを否定し(無我)、現象界に存在する個人を、諸条件に依存して(縁起)、絶えず変化生成する五要素(五蘊)に分け、その中の認識作用(識)に輪廻の中核的役割を担わせた(ダルマの項参照)。「識」を巡る考察は仏教内部で展開し、唯識学派の「アーラヤ識」説などを生む。

(後藤敏文)

ダルマ (法)

一般に「法」と訳されるダルマ(男性名詞 dhārma-)には「法則、理法、規範、秩序、教説、道義、義務、法律」など多様な用法がある。動詞 Dhar「支え持つ」からの派生語で、原義には、全体や社会の中で物事や人が「担う」役割の意味が推定される。最古のリグヴェーダ(ヴェーダの項参照)では中性名詞 dhāman- が用いられる。より上位の普遍的秩序はリタ「台致していること、宇宙秩序、天理、天則、理法」とよばれ、ダルマより個別・限定的な規範はヴラタ「掟、誓い、誓戒」とよばれた。サッティヤが「真に存在する(もの)」「真理」を意味するのに対し、ダルマはむしろ現象面での「現れ」「個々の事物・事象の本質的)性質・あり方」を捉えて表現する場合に用いられる。

バラモン教(ヴェーダの項参照)の「ダルマストトラ」(法経)、ヒンドゥー社会における「ダルマシャーストラ」(法典)は、王の義務(ラージャダルマ)を中心に社会と構成員の生活規範、法律の意味でのダルマを定めた教典である。ヒンドゥー社会の三つの生き甲斐(トリヴァルガ)には、利益(アルタ)、愛(カーマ)と並んで、宗教的倫理的に正しいあり方を意味するダルマ(正義)が挙げられる。

仏教では「法、達磨、曇摩」などと漢訳され、現象界の事物を成立させている「法則」から出発して、一方では「教理、教義」、他方では「現象的あり方、存在」の意味で用いられる。法と律(ダンマ・ヴィナヤ)という場合には、経律論三蔵の中、経(スートラ、スッタ)に示される「教理」を謂う。「論」はアビダルマ(対法、法に関する議論、阿毘達磨)を指し、仏教教義としての「法」に関するスコラ的議論である。恒久的実体を認めない仏教では、現象界の事物は諸要素から構成され(サンスカーラ「行」、諸条件に対応・依存して仮に現象し(縁起)、生成変化・分解を免れないもの(諸行無常))と考える(カルマの項参照)。

この観点から、思考(manas「意」)の対象、すなわち「もの」や「事柄」一般にもダルマ(パーリ語ダンマ dhamma)の語を用いた。「諸法無我」は、時間・空間中に認識される現象界の全事物には永続の主体がないことを謂う。部派仏教のアビダルマでは、色彩・形状のような物質的属性や、煩惱など心理作用を含む諸現象の「あり方」「カテゴリー」を「五位七十五法」(説一切有部)、「五位百法」(唯識派)などとしてまとめ、体系化した。

ジャイナ教哲学や、正統ヴァイシェーシカ学派の範疇論では、ダルマを「運動を成り立たせるもの」、その否定形アダルマを「停止をもたらすもの」の意味で用いる。論理学では、「山に煙がある」という場合、述語されるべき煙はダルマとよばれ、そのような要素を有する主題(山)はダルミン「ダルマによって特色づけられるもの」とよばれる。

(後藤敏文)